

第2分科会

研究主題

運動する楽しさにふれ、
よさを発揮できる子どもを育む体育学習の創造
—感動体験を味わうことができる陸上運動・体づくり運動を通して—

福岡市立別府^{べふ}小学校

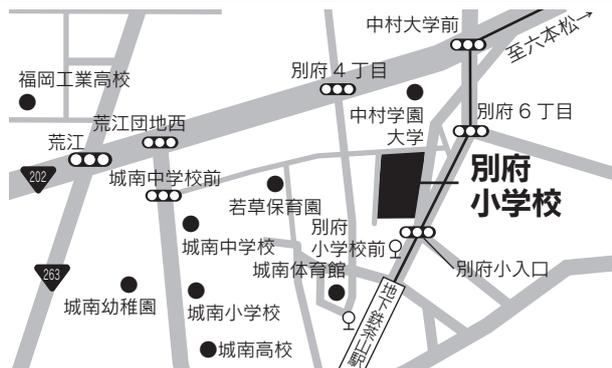
日程

9:00	9:50	10:35	10:45	11:30	12:00	13:00	13:10	14:20	14:50	15:00
受付	公開授業①	休憩	公開授業②	フレッシュタイム スマフル体操	昼食	開会行事	質疑・協議	発表・自評	指導助言	閉会行事

公開授業案内

公開授業①	第4学年	「高跳び」	運動場
	第5学年	「体力を高める運動」	体育館
公開授業②	第1学年	「にこにこいっぱいランドをつくろう」	運動場
	第6学年	「走り高跳び」	運動場《雨天時体育館》

学校所在地図



交通機関

- 最寄駅
「茶山(福岡市営地下鉄)」下車 徒歩5分
- 経路
博多 発 8:19 8:22 8:28
↓福岡市営地下鉄空港線
天神 着 8:24 8:27 8:33
(乗換)
天神南 発 8:34 8:38 8:42
↓福岡市営地下鉄七隈線
茶山 着 8:45 8:49 8:53

学 校 概 要

学 校 名	福岡市立別府小学校		
校 長 名	村 川 清 敏		
学 級 数	27学級	児 童 数	845名
所 在 地	〒814-0104 福岡市城南区別府6丁目9番1号		
連 絡 先	TEL 092-821-1238 FAX 092-821-1239		

【学校紹介】

別府小学校は、昭和35年4月1日に鳥飼小学校より独立開校し、昨年度50周年を迎えた。地下鉄七隈線の開通などもあり、交通の便もよく自然環境に恵まれていることから落ち着いた住宅地、文教地区として発展を続けている。



国際交流においては、平成9年度よりニュージーランドのリムエラ・インター・メディエイト校と姉妹校の締結をし、リムエラから毎年、本校からは隔年で、訪問団の児童・生徒・教員がホームステイ体験並びに、授業を行い交流を深めながら今年度で14年目を迎えている。



体育科の研究においては、昭和36年に福岡市教育委員会の研究指定を受け、昭和63年11月17日には日本学校体育研究連合会（後援）文部省より保健体育の指導研究により表彰を受けるなど、今日まで県教委・市教委の指定を受けながら研究を深め、

体育科指導の深化・充実を進めてきた。



研究主題

運動する楽しさにふれ、よさを発揮できる子どもを育む体育学習の創造

一感動体験を味わうことができる陸上運動・体づくり運動を通して一

福岡市立別府小学校

1 主題設定の理由

(1) 大会主題とのかかわりから

ア 運動の楽しさを味わわせ、体育的学力の確かな定着を図る

本校では、子ども達が運動のもつ楽しさ（魅力や特性）にふれることで、運動に関する「技能面」でのよさ、「態度面」でのよさ、「思考・判断面」でのよさを発揮することができると考えている。そうすることで、体育的学力を身に付け、自ら進んで運動するようになるはずである。また、そのよさを発揮するために、「わかる」「できる」「かかわる」「活用する」活動を通して、感動体験（低学年・夢中体験、中学年・全力体験、高学年・成功体験）を味わうことが必要である。このことによって、運動することが好きになり、運動が日常化され、結果として子ども達の体力も向上するであろうと考えている。

イ 幼児児童生徒の発達段階を踏まえる

体育的学力の確かな定着を図るには、各運動領域ごとに子ども達の発達段階を踏まえ、指導内容を体系化・明確化する必要がある。また、運動する楽しさにふれるためには、子ども一人一人が運動の特性にふれ、活動を進めていかなければならない。そのために、教師は子ども達の発達段階と実態を的確にとらえ、学習を計画していくことが重要となる。そこで本校では、子ども達が、計画的に自分のよさを見つけ、そのよさを発揮し、よさを振り返ることができるような体育科学習の学習過程の研究を進めている。

(2) 地域・子どもの実態から

本校は、福岡市の都心近くに位置しており、バスや地下鉄など交通の便がよく、学校周辺には、大学・保健所・区役所等公共施設が整備されている。しかし、地域の利便性が増すにつれ、マンション等が増加し、子ども達が遊ぶ場所も限られてきている。また、習い事や塾通いが多く室内遊びも増加している。そのために、外遊びをする機会が減ってきている。

子ども達の中には、親しい教師や友達には自分の思いを伝えられても、それ以外では伝えられなかったり、マイペースにものごとを決めてしまう姿もみられる。これらは、子ども達が人とかかわる体験が不足していることを意味し、一緒にものごとをやり遂げる生活体験が不足していると考えられる。

また、本校の子ども達の運動の機会が減ったことは、結果として体力の低下にもつながっている。新体力テストも全国平均と同じかやや下回る結果が全体的に見られる。特に、反復横跳びや立ち幅跳びの記録が全国平均より大きく下回っている。

これらのことから、運動の楽しさにふれ、遊びの中でも外で元気に遊ぶことで運動を日常化させることが必要である。また、自分のよさ・友達のよさに気づき、一緒に伸びていこうという意欲が大切だと考える。

(3) 本校の教育目標から

『はじめに子どもありき』を基本に、21世紀をたくましく生きる健康で思いやりをもった個性豊かな子どもの育成

本校は、福岡市における59番目の小学校として開校し、本年度で51年目を迎える。その間、学校・PTA・家庭・地域の連携により、よりよい学校づくりがなされてきた。そして、今年度は平成23年度から完全実施となる新学習指導要領の実動の年にあたる。新学習指導要領は、国際化・高齢化等といった社会の変化への対応、いじめや不登校・道徳性の低下や体験不足・体力低下等といった子どもを取りまく諸問題への対応等「生きる力」を育むという理念を引き継ぎながら、諸問題を解決する形で進められている。そこで本校では、「21世紀をたくましく生きる健康で思いやりをもった個性豊かな子どもの育成」を中核に、知・情・意・体のバランスのとれた児童の育成を学校教育目標に掲げ、自分の持ち味を発揮し、お互いに切磋琢磨しながら、お互いに高め合う子どもの育成に力を注いできた。この学校目標をさらに具現化するためには、「わかる、できる、かかわる」活動を通して子ども達が生き生きと活動し、運動・スポーツとの新たな接点を広げていくことを視野に入れた体育科学習の展開が必要であると考えます。

(4) これまでの研究から

本校では、これまで昭和36年度「市体育カリキュラムの実践的研究」という主題の研究を皮切りに長年に渡り体育科の研究を進めてきた。平成7年度から平成16年度までは健康教育を主題に体育科と他の教科等との関連を研究してきた。また、平成18年度から体育科を中心に「感動体験を味わわせる体育学習」の研究を進め、運動の楽しさを味わわせることや運動の持つ特性に十分に触れさせることができる支援のあり方について究明してきた。昨年度からは、新指導要領の内容を考慮し、指導内容の体系化、明確化という課題にも取り組み、領域別のカリキュラムの作成や体育科カリキュラムの再編成も行った。

本年度は、これまでに明らかになったことをもとに、子どもたち一人一人が、運動のもつ特性（楽しさ）にふれ、自分の力が伸びていることを実感できたり、仲間とのかかわりのなかで習得した知識や技能を活用し課題解決したりすることで、自分のよさに気づき進んで運動に取り組む子どもを育てる研究を進めていきたい。

2 主題の意味

(1) 運動の楽しさにふれるとは、

子ども達は、それぞれの運動・運動遊びが有する特性にふれたり、本来その運動がもつ魅力にふれたりすることで、運動の楽しさに夢中になることができる。子ども達一人一人が「わかる」「できる」「かかわる」「活用する」学習をつみかさね、感動体験を味わうことで運動の知識や技能だけでなく、コミュニケーション力や論理的思考力を身に付けることができるであろうと考えている。また運動の楽しさにふれるためには「こういうことをしたい」や「こんなふうになりたい」というような、運動に対する個人的な欲求を持つことが必要である。と同時に、発達の段階や運動の系統性を重視することが必要である。

(2) よさを発揮することができる子どもとは、

子どもが本来もっている心身の可能性に培い、運動や仲間とともに、体育科の学習を進める過程で、子ども同士のかかわりあいや元を、お互いのよさに気づき合ったり、認め合ったり、学び合ったりする場面を通して、自らのよさに気づき、自らのよさを確かめ、自らのよさが育っていることを実感することができれば、子どもたちには、進んで楽しく運動する意欲、互いの運動への思いや考えを尊重し合う態度、自らの運動の課題の解決を目指して活動の仕方を考えたり工夫したりして活動を展開する学びが育つものと考えます。

本校では、運動の楽しさを味わい、よさを発揮できる子どもの資質や態度を次のように考えている。

- ・運動に進んで取り組む**意欲・実践力** (挑戦, 克己, 自己判断, 自己決定, 競うことを楽しむ)
- ・仲間と活動した結果として得られる有用感や達成感, 爽快感を**感じる心** (個人・集団)
- ・運動を通して仲間とかかわり, 共感し**交流する力** (意思合意する力, 表現力・社会性)
- ・基礎的な身体能力 (**体力及び運動の技能**) や**知識**
- ・運動や自己のからだについて課題を発見し考え**判断する力** (問題発見・思考・判断・表現する力)
- ・運動を工夫して**つくりかえ, 表現する力**

(3) 体育学習の創造とは,

体育科の学習はもちろん, 運動の日常化のために朝の帯タイム (フレッシュタイム) の時間や集会等の運動の環境を整えていくということである。また, 1単位時間・1単位だけでなく, 発達の段階や運動の系統性も考え, 6年間のカリキュラムを通して考えていくということである。そうすることで, 運動が日常化され, 自ら運動の楽しさに触れたり, 技能や体力も向上したりしていくと考えている。

(4) 感動体験を味わうことができるとは,

一人一人が, 自分のすべての能力を活かしながら, 仲間と夢中になって活動し, 「楽しいな」と運動のおもしろさを発見したり, 実感したりすることを共有することである。子どもが夢中になって自分なりの世界を構成し, 活動にのめり込んだり, その子ならではの発想と工夫で活動を展開したりしていく中で, 運動の楽しさにふれたり, 仲間とのかかわりを通して, わかった・できた・のびた・達成したなどの有用感や達成感が感じられるような活動を仕組んでいくようにしたい。

○ 各学年部における感動体験

低 学 年	夢 中 体 験	イメージや用具との出会いを通して, 夢中になって楽しく活動する体験
中 学 年	全 力 体 験	友達とのかかわりを通して, 自分の力を出し切る体験
高 学 年	成 功 体 験	自分との出会いを通して, 達成感や充実感を味わえる体験

3 研究の目標

体育学習において, 運動する楽しさにふれ, よさを発揮できる子どもを育成するために, 感動体験を味わわせることができる効果的な単元計画や指導・支援のあり方を究明する。

4 研究の仮説

感動体験を味わわせるための陸上運動・体づくり運動の単元計画や指導・支援を工夫すれば, 子ども達は, 運動する楽しさにふれ, 自分のよさを発揮できる実践的態度や技能, 思考・判断を身に付けた子どもが育つであろう。

そのために (1) 体育科学習における単元計画と指導・支援 (2) 運動の日常化のための環境づくりを行う。

(1) 体育科学習における単元計画と指導・支援

- ① 活動内容の工夫「わかる・できる・かかわる・活用する活動をつみかさねた学習過程」
- ② 場や教具の工夫「運動の楽しさを味わい, よさが発揮できる場や教具」
- ③ 学習ノートの工夫「評価と指導を一貫して行える個人学習ノート」
- ④ 指導内容の明確化・体系化「身に付けさせたいこと, 運動の系統性を意識した単元構成」

(2) 体育科学習以外での運動の日常化のための環境づくり

- ⑤ フレッシュタイム「学級・学年・異学年集団での始業前運動」
- ⑥ スポーツ集会「異学年で運動を楽しむ集会活動」・ミニ集会「同学年集団での休憩時間運動」

5 研究の構想

(1) 体育科学習における単元計画と指導・支援

① 活動内容の工夫

一人一人が運動の楽しさにふれるために「わかる」「できる」「かかわる」「活用する」学習をつみかさねていけるような学習過程を仕組んでいく。

- ・ 子ども達の発達の段階やそれまでの生活経験や学習経験をもとに、自分の考え・感じ方・判断する力をフルに生かして、自分の解決すべき課題や解決の仕方が『わかる活動』。
- ・ 学習の積み重ねを通してパワーアップした自分の表現や活動の仕方を生かしながら、自らの課題解決のための工夫や自らの願いの実現が『できる活動』。
- ・ 単元や一単位時間の終盤に設定された、学習を通して、自分が感じた運動のたのしさを共に感じ合い、友だちと『かかわる（ことができる）活動』。
- ・ 自分が得た知識や技能、作戦などを実際のゲームや活動で『活用する（ことができる）活動』。

② 場や教具の工夫

子どもが、自分の力に応じためあてをもつことができたり、そのめあての解決に向けて活動の仕方を工夫したり、その運動を安全に行うための場や教具の工夫を行う。

- 運動の楽しさを味わう
 - ・ 今持っている力で運動の楽しさや喜びに触れることができる場や教具
 - ・ 質の高い活動に結びつけることができる場や教具
 - ・ 新しい工夫を加えて運動を楽しむことができる場や教具
- よさを発揮する
 - ・ よさの共感（教師→子ども 子ども←→子ども）
 - ・ よさを発揮させるための指導・支援
 - ・ 単元、一単位時間の終盤でよさが確認できる場づくり
 - ・ 以前の学習や前時と比べて、よさが育っていることを実感できる場や教具

③ 学習ノート工夫

課題解決のために行った活動や、その子ども自身のその時々思いや願いといった学びの姿を記録した学習ノートを活用して、自分の変容に気づいたり、自分自身の学びを把握したり、活動や学びを振り返り方向付けたりすることができるようにする。

- その時間の活動や各学習過程の活動、学習単位を通しての活動について課題にそって振り返ることで、学習の成果、問題点、不明な点に気づき、活動の達成度や頑張りを子ども自身が自覚し、今後の活動への見通しをもたせる。
- チームやグループ内の話し合いを通して、自分や友だちの活動を認め合う。
- 教師が、子どもの活動状況について、計画に沿って進んでいるか、困っているところはないかなど、対話やアドバイス、評価をおこなう。

④ 指導内容の明確化・体系化

発達の段階に応じた運動領域別のカリキュラムを作成し、その上で子どもの実態を配慮した単元の構成を考える。また、身に付けさせたい動きや技能などを明確にする。

- 運動領域別のカリキュラムからその学年に必要な子どものよさ（関心・意欲・態度、思考・判断、技能）をピックアップする。
- アンケート、類似な動き、試しの活動等から子どもの実態を把握し、その単元で目指す子どもの姿を考える。
- 運動の系統性や子どもの実態から、その単元で身に付けさせたいことを考え、単元構成や評価の計画をたてる。

(2) 運動の日常化のための環境づくり

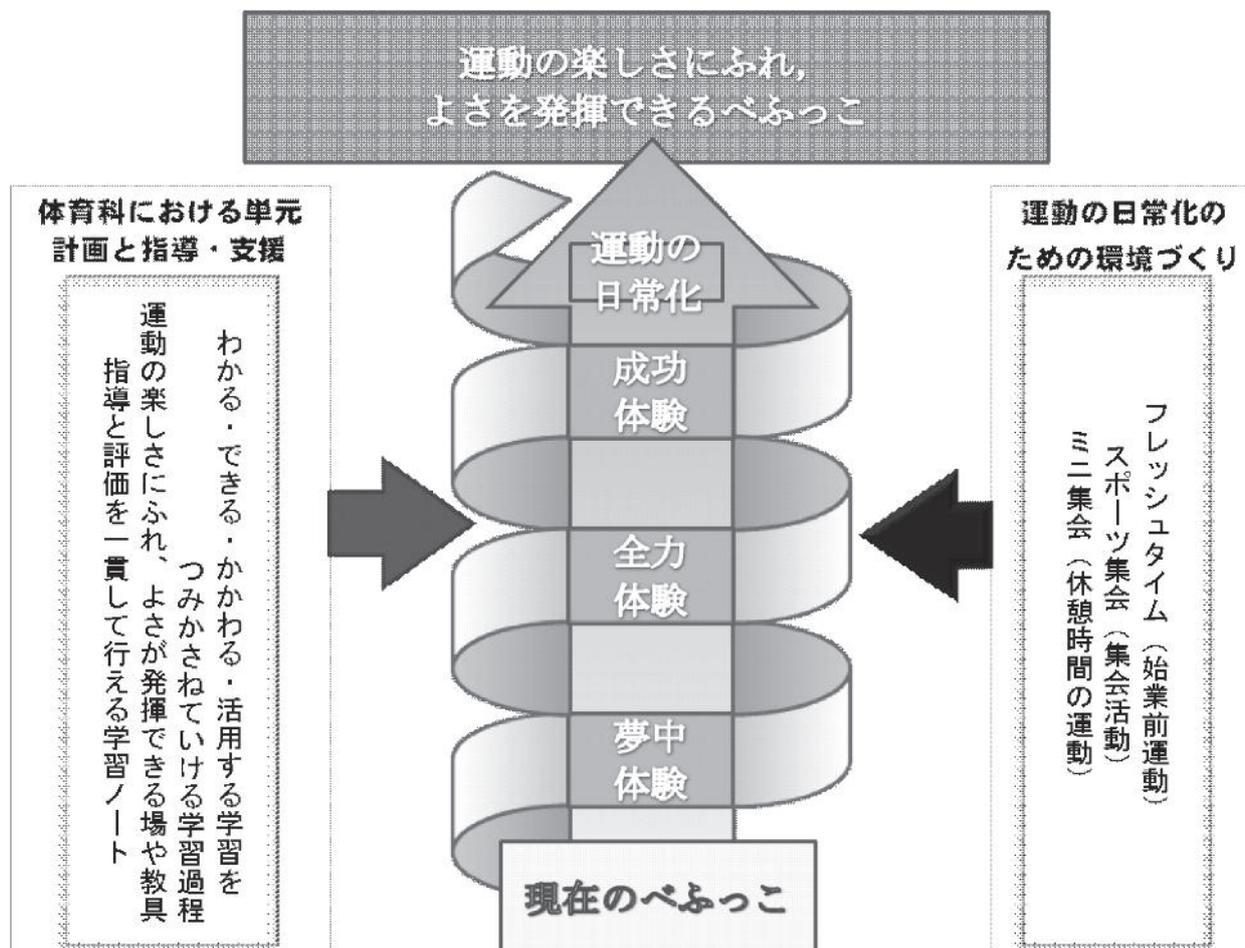
⑤ フレッシュタイム

- 学級、学年、異学年集団での始業前運動
 - ・ 体を動かすことで、身体能力を身に付けるとともに情緒面や知的な発達を促す。
 - ・ 集団活動を通じてコミュニケーション能力を育成する。
 - ・ 筋道を立てて練習や作戦を考え、改善の方法などを互いに話し合う活動などを通じて論理的思考を育む。

⑥ スポーツ集会・ミニ集会

- 異学年集団での集会活動（スポーツ集会）
 - ・ フレッシュタイム等で知り合った異学年集団で運動を楽しむことで、運動を身近に感じることができるようにする。
 - ・ 集団活動を通してコミュニケーション能力を育成する。
 - ・ 筋道を立てて練習や作戦を考え、改善の方法などを互いに話し合う活動などを通して論理的思考を育む。
- 昼休みのスポーツ活動（ミニ集会）
 - ・ 昼休みに集会委員会が企画し、同学年集団で運動を楽しむことで運動を身近に感じることができるようにする。
 - ・ 集団活動を通してコミュニケーション能力を育成する。

(3) 研究の構想図



【実践例①「第2学年 たかとびあそび」陸上運動領域部】

単元の前半のめあてを「じまんのジャンプをたくさんつくろう」、後半を「じまんのジャンプをパワーアップさせ、力いっぱい楽しもう」とし、活動を発展させ友だちの動きにも目が向くようにしながら跳の運動遊びを楽しむことをねらった。

活動の場は、動物になり連続して調子よく跳ぶ「びよんびよんランド」、忍者になりふわっと高く跳ぶ「山ごえランド」、忍者になり連続してはやく跳ぶ「ゴムとびランド」、オリンピック選手になり高く跳ぶ「オリンピックランド」の4つに分け、お気に入りのランドでじまんの動きをつくるようにした。

発見したじまんの動きを『ジャンプじまんカード』に記録し掲示することで、よさを財産としてとっておけるようにした。また、教師がその動きを紹介することで、評価と支援を一体化できるようにした。



山ごえランドやびよんびよんランドで遊ぶ子ども

【実践例②「第3学年 体づくり運動」体づくり運動領域部】

1単位時間の前半を「体ほぐしの運動」、後半を「多様な動きをつくる運動（用具を操作する運動）」と位置づけた。

「体ほぐし運動」では、めあてを「体を動かして、心と体をほぐそう」とし、本校の子ども達が慣れ親しんでいる「スマフル体操（本校独自の準備体操）」や「ストレッチ」を取り入れ、楽しい雰囲気の中で体を動かせるようにした。

「多様な動きをつくる運動（用具を操作する運動）」では、めあてを①「友だちと協力し、いろいろな動きをつくろう。」②「つくった動きを見せ合って、友だちの動きのよさをみつけよう。」③「友だちのつくった動きにちょうせんしよう。」と3段階に分け、動きをつくり、つくった動きで楽しむことができるように考えた。



ゴムの場で動きをつくっている子ども達

「つかむ・持つ・おろす・まわす・転がす」「くぐる・跳ぶ」「運ぶ」「投げる・捕る」「乗る」という5つの基本となる多様な動きを体験させるために、ボール・Gボール・なわ・フラフープ・ゴムの5つのコーナー（場）を設定した。

学習ノートには、「満足度」「学習の振り返り」「考えた動き」の3観点から自己評価させることで、自分のよさを振り返ることができるようにした。また、子ども達の感想から次時の支援を考えていった。

7 研究の成果と課題

(1) 成果

- 走跳の運動遊びにおいて「△△になり□□に跳ぶ○○ランド」と動きを整理して提示したことで、子ども達は楽しく特性に触れることができた。
- 体づくり運動において、めあて2を「①友だちと協力し、いろいろな動きをつくろう。②つくった動きを見せ合って、友だちの動きのよさをみつけよう。③友だちのつくった動きにちょうせんしよう」と3つに分けたことで、新しい動きに楽しく挑戦する姿が見られた。

(2) 課題

- 「体づくり運動」において多様な動きをつくる運動の動きが体力を高める運動のどの動きに発展していくのか整理する必要がある。
- 走跳の運動遊びにおいて、パワーアップという言葉は、動きの発展、遊びの発展として低学年の子どもにはやや分かりにくいことが分かった。
- 低学年の走跳の運動遊びと高学年の陸上運動をつなぐ、中学年の走跳の運動の系統的な単元構成を考えていく必要がある。